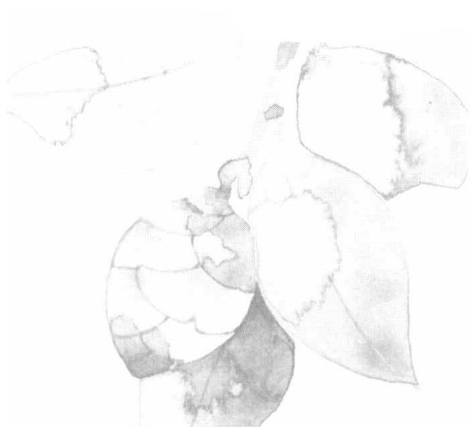


母ありてこそ

生方たつゑ



生方たつゑ
母ありてこそ



母ありてこそ

定価 九五〇円

昭和五十三年十月二十二日 第一刷発行

著者 生方たつゑ

発行者 大沼 淳

発行所 文化出版局

東京都渋谷区代々木三の二の一

郵便番号 一五一

電話(〇三)三七〇一三一(代表)

振替 東京二一九五六七〇番

印刷所 カバー・表紙 文化カラー印刷

本文 図書印刷

製本所 大口製本

目 次

母への感謝 7

母に及ばぬ 9

感謝する心 19

遠い先を見ていた 27

「あんたさんの墓場ですよ」 36

心の遺産 55

己に負けず 57

着物へのあこがれ	66
櫛について	77
鏡への怖れ	83
桃の花の信仰	89
竹の皮の思いやり	93
水　　霊	102
火　　の　　神	118
母の彼岸	126
母の風土	132
御　　厩	133
物のいのちのある限り	136

面

影

143

きびしい姿

145

物語上手

156

さんきらいと老母

156

狼蒸気とメルヘン

163

知恵の灰

170

大祭りの鮎

173

粽の精霊

178

父と母との間

183

嫁いでのからの彷徨

190

短歌との出会い 205

くらしの噴火口を求めて 207

第一歌集『山花集』のころ 223

戦いすんで 246

あとに 276

装丁
堀
文子

母ありてこそ

母への感謝

母に及ばぬ

春だというのに、突風が吹いて寒い日であった。明日は雛祭りの日だという宵、家族が食事している最中に、何を考えたのか娘が言った。

「ママは伊勢のおばあちゃまには及ばないでしょう？」

「それどういこと？」

とほんとうはきくところであつたけれど、私はたちどころに、

「そう、とてもとても、あの真似は私には出来ないわ」

と素直に答えたのである。

それはかくしかじかの理由によって、という筋合いがあるはずであつたけれど、それらの条件などかわりなく、私には母の生きる日の信条そのままに行動して生涯を

終えた凜としたものに打たれるだけで充分頭が下がっていたからである。

「私、おばあちゃまのなさることを見ていたのは小学校へ入ったばかりだったけれど、えらいおばあちゃまだと思ったのを、今も忘れないわ」

という前置きをして、娘は私の記憶をたぐりよせさせる話をした。

夏休みになると、山ぐに育ちの娘をつれて、私は年に一度のふるさとがえりを許されていた。ほんの二週間ほどの間の祖母とのくらしでしかなかった娘が、幼い目で、祖母というものを見ていたのであろう。

朝は食事前に、まず神棚に燈明をあげ、そのあと仏壇の前に座って、必ず般若心経を唱える。その行事がすまぬ間は食事にうつらない、という習慣が、母にとっては全く当たり前のことであつたらしい。

今日はいそがしいから省略する、という身勝手な理由に甘えることのないくらしであつた。

たまさか伊勢の祖母に逢う娘としては、これまた全く驚異なくらしであつたであらう。「それに朝四時ごろ起きて、毎朝、月読つきよみさまや外宮へお参りしてこられたでしょう。雨

の日でも、暴風雨の日でも」

忘れていた母の日常が、この娘の思い出の中でたしかなものとして生きていたのか、と思うと、私は胸熱くなった。

「一日くらいは私も出来るけれど、とてもとても私には真似は出来ませんよ。伊勢のおばあちゃまはそうしなければいけない『行』のようなものを自分のくらしの中へ組みこんでいられたんですね。まるで禅僧の行みたい」

私はそう言うしか方法はなかった。隣の席から孫が口を出す。

「それ誰の話なの」

「伊勢のおばあちゃまのこと。私のママのことよ」

滅多には話さない昔のことを、この孫は初めてききただしてきたのである。

「昔の人はえなかったもんだ」

彼は興味ぶかげに私たち母娘の思い出をきいているようであった。

忘れていたことが、つぎつぎと思ひ出されてくる宵であった。

かつては、お百度参りをする母を私は知っていた。母の家からは月読さまも外宮さまも、そう遠くはなかったけれど、百度を百か日つづけることによって念願を果たすのりをする、というお参りであるのだ、と私はきかされていた。

晩にかけて行なうので、冬は感覚をうしなうほど寒さがこたえる、という話もきいた。『帳面にでも書きしるして百回という回数を覚えているのですか』

ときくと、

「藁を百本切り揃えたものをもって、それを一本ずつ抜き、抜き終わると百回お参りを完了しますのや」

気の長いお参りにはちがいがなかったけれど、目に見えぬものにいのりをかけるという母のひたすらな行爲を見ていた私には何を言うすべもなかった。

女の姉妹ばかりのわが家では、時に、

「うちの母あさま、えらい信心のお方ですな。迷信いうのどちがいますやるか」

などと、陰口を利いたりしたけれど、そのようなとき、

「迷信でもええ、そんなら、ひとすじに打ちこんで何でもやってごらんなさることや、

あんなさんは何が出来ますやろか？」

と、何気なく言う母だったけれど、口で言うことは容易だが、行なりことはあそびでは出来まへん、とつねづね言っていることを知っている姉妹は、また口をつぐむしかなかったのである。

ぼつぼつ戦いがはげしくなつたころ、大学の野外訓練に参加した孫が、帰宅して高熱を患^うみ、原因不明のまま病床についた。

「疲労なのか、腸チフスなのか、病状がはっきりしませんね」

と、医師も診断に苦しんだ様子だったけれど、そのとき、すでに母は七十五歳を過ぎていたのではなかったか。

老齢であった母は、原因不明の熱を患^うむ孫のために、午前二時に起きて、また百度参りをつづけたのを私は知っている。

「とても私は孫のために午前二時に起きてお参りなど出来ませんよ。私は自分のためにだって出来ないもの。それも一日くらいなら無理に起きないこともないけれど。孫には

気の毒だけれど、少々ならず私は怠けもののおばあさまだわ」

とつけ加えて、私はわが母が行なった日常のくさぐさを思い出すのであった。

気軽に姉妹たちがより合って「うちのお母さま、迷信家や」などと言っていたことも事実だけれど、その中から私たちは「母の誠実さ」と「誠実を形にあらわすための行をつみ上げる努力」を教えられてきたようだ。

「これでおしまいや、と投げてしまうときは敗けや」

ともよく言った。

もう一度努力してみても、どこまでも投げやりにはいけない。あなたさんたちは何て根気のないお人や、と母がつぶやいていたときには、さぞかしわが娘たちのなげやりの生き方を嘆いていたことであろう。

母はぼんやりと手持ちぶさたでいることはほとんどなかった。少なくとも時間をもてあますことはなかった。家事の定まった片づけごとが早く終わったような日には、押入れのこうりの整理をしていたり、繕いものをしていたり、まだ早いと思われるのに夏の